様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：８４４３３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１１０６

研究課題名（和文）有文当て具痕跡から窺える律令国家成立前後の地方の主体性と対朝鮮半島交流の研究

研究課題名（英文）Study on local Initiative and Interaction with the Korean Peninsula around the establishment of the Ritsuryo State, based on the inner patterns of the pottery by beating technique using the anvil

研究代表者
寺井　誠（Terai, Makoto）

地方独立行政法人大阪市博物館機構（大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪・大阪歴史博物館・係長

研究者番号：６０３４４３７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、土器製作の際のタタキ技法で用いられる当て具、および内面に残る当て具痕跡を基にして、主に６～９世紀の日本列島と朝鮮半島の交流を明らかにすることを目的とする。
６～７世紀の北部九州では、朝鮮半島の加耶・新羅の影響と考えられる平行文当て具の使用があり、在地勢力による主体的な交渉の可能性がある。一方、８～９世紀の日本海側など畿内以外の地域では、平行文や格子文など多様な当て具が使われ、新羅との共通性がある。この時期、新羅が不安定化することから、新羅からの移住者による外的影響が考えられる。さらに、本研究では日本各地の当て具の特徴から日本列島内の地域間交流も明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
須恵器の内面にある同心円文の当て具痕跡は、考古学をしている者であれば一度は見たことがある。ただ、残っているのが当たり前すぎるせいか、研究の俎上に上がることはほとんどなかった。本研究では、朝鮮半島まで視野に入れた当て具及び当て具痕跡の時期・地域的多様性を明らかにし、当て具痕跡が同心円文以外にもあることを示すとともに、当て具・当て具痕跡の研究を基に日本列島内の地域間交流、対朝鮮半島交流を解明できる展望を示すことができた。また、展示や講演会といった普及事業を通じて、内側にある「文様」の意味について模式図を作成して具体的に説明することにより、陳腐化しつつある類の考古資料への関心を高めることができた。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to shed light on interactions of the 6-9th century between the Japanese Archipelago and the Korean Peninsula, based on researches on anvils and the inside patterns of pottery made by beating techniques. In northern Kyushu in the 6-7th century, anvils with parallel-line patterns, influenced by Gaya and Silla, were used in pottery making, and these anvils are thought to have been proactively adopted by local powers in northern Kyushu. On the other hand, in the regions, excluding the Kinai region, such as those on the Japan-sea side, the anvils with the diverse patterns common to Silla, such as parallel-line and lattice, were used in pottery making. The background to the adoption of diverse kinds of anvils can be attributed to the arrival of migrants from Silla due to the political destabilization of Silla in 8-9th century. In addition, this study of the various anvil patterns all over Japan clarifies the variety of the interactions within the Japanese Archipelago.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　タタキ技法　当て具　有文当て具痕跡

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

筆者は以前より日本列島で出土する朝鮮半島系土器に関心をもち、その製作技法の把握に努めてきた。特に顕著な特徴を見せるのが、タタキメ・当て具痕跡であり、これまでも観察で注意を払ってきたものの、このテーマに正面から取り組んだことはなかった。

2016～18 年度の科学研究費の課題研究『渡来文化の故地についての基礎的研究－新羅・加耶的要素を中心として－』（基盤研究（C） 16K03175）にて、鉄鐸、角杯、鐔付鉄鉾、鍛冶具副葬習俗、甑副葬習俗とともに、同心円文以外の有文当て具痕跡についても課題として取り組んだ。その結果、以前より把握していた６～７世紀の北部九州の事例だけではなく、８～９世紀においても、同心円文以外の当て具痕跡があり、かつ、後者についてはその分布が山陰や北陸といった日本海側に偏ることから、畿内を通さない朝鮮半島との交流の結果と推測するに至った。

このように当て具痕跡の比較検討から対朝鮮半島交渉を解明できるという見通しから、本研究課題「有文当て具痕跡から窺える律令国家成立前後の地方の主体性と対朝鮮半島交流の研究」を申請し、採択されることなった。

２．研究の目的

本研究は、６～９世紀における地方独自の朝鮮半島との交流を考古資料から具体化し、律令国家成立前後の中央集権化が進む中での地方の主体的な対外交渉を明らかにすることを目的とした。そこで着目したのが、中央ではなく地方で多様性を見せる当て具痕跡である。日本列島で「当て具痕跡」といえばほとんどの場合「同心円文」を思い浮かべるであろうし、平行文や格子文が内面に残っていると、タタキメではないかと錯覚してしまうこともあろう。ただ、平行文当て具痕跡については６～７世紀の北部九州、平行文に加え、格子文、扇状文、放射状文といった当て具痕跡の須恵器は８～９世紀の日本海側など畿内以外の各地で確認できる。

このように同心円文が日本列島内にて多数派であるのは紛れもない事実であるものの、確実に同心円文以外の有文当て具痕跡が存在する。こうした当て具痕跡を総括的に表現するのに、本研究では「異形有文当て具痕跡」と呼称することにした。この「異形有文当て具痕跡」は、限られた時期・地域を中心に分布しているという特徴から、他の考古資料では見えなかったような地域性や地域間交流を解き明かすことが期待できる。

一方、朝鮮半島では同心円文以外の当て具痕跡、すなわち平行文や格子文といった異形有文当て具痕跡は、三国時代の加耶・新羅、統一新羅では普通に存在し、むしろ同心円文が少数派の場合もある。よって、朝鮮半島では日本列島のように「異形」という呼称は使うことはできないため、日本列島でのみの適用とする。ただ、同心円文以外の当て具が一定量使われるわけであるから、日本列島で「異形有文当て具痕跡」を残す土器は、朝鮮半島からの影響を受けたものと推定でき、それが畿内ではなく、地方で採用されていることが多いことから、地方勢力と三国時代の加耶・新羅、そして、統一新羅との何らかの繋がりが想定することができる。

ただし、本研究の申請時には「地方の主体性」という表現をしたものの、「主体性」だけでは説明できない外的要因があることも研究の進展で見えてきたので、その検討も進めた。

３．研究の方法

当て具痕跡の研究に限ったことではないが、当研究の柱となるのは実物資料の調査である。実物を観察することにより、報告書や既往の研究では触れられていないような新知見を得ることができる。実物調査では報告書にない情報、特に当て具文様と木目との関係を把握するよう努めた。また、記録の採り方については、非常に多くの点数の資料を観察することから、効率性を上げるために、デジタルカメラで資料をさまざまな方向から撮影した。また、ノートパソコンを持ち込んで、撮影した写真を取り込み、観察記録を入力することを主とし、実測図による記録は必要最小限に留めた。共伴資料についても時期決定の際に必要となるため、可能な限り実物確認調査を行うことにした。

４．研究成果

本課題研究の成果は、本文 114 ページ、原色図版 16 ページの研究成果報告書にまとめ、2023 年３月に刊行した（寺井 2023）。詳細は研究成果報告書の冊子か、寺井誠の Research Map で公開している PDF ファイルをご覧いただきたい。以下ではその成果を抜粋して記すこととする。

（１）木製当て具と土製当て具（報告書第２章）

「当て具痕跡」がどのような道具を使って生じるのかを知るのに、まず必要なのは「当て具」そのものの観察である。本章では古墳時代後期から奈良時代にかけての日本及び朝鮮半島の木製当て具の集成を行うとともに、古墳時代中期以降の日本列島の土製当て具の集成も行った。

木製当て具は日本列島で６遺跡 11 点、朝鮮半島で２遺跡２点あり、韓国の火旺山城以外の資料はすべて実見した。日本列島については、明らかに同心円文を刻んでいる事例が４点あり、長原遺跡（大阪市平野区）や久米窪田Ⅱ遺跡（松山市）は年輪に沿って同心円文を刻んでいる一方

で、九州大学筑紫地区遺跡群（福岡県春日市）の２点は、年輪に沿わずに同心円文を刻んでいた。また、余部日置荘遺跡（堺市東区）の４点を含む７点は芯持材を使っているものの、刻んだ痕跡は確認できず、木材の硬部が露出することによる同心円文と判断した。元岡・桑原遺跡群（福岡市西区）の２点は当たり面が柾目であり、同じく木目の硬部が露出して平行文となっている。

このように実例は少ないものの、日本列島については当て具痕跡の地域性と合致している。例えば、北部九州では平行文当て具痕跡や、年輪と交わる同心円文当て具痕跡が確認されていることなどである。須恵器の多くが木製当て具を使っていると思われるので、今後とも当て具と当て具痕跡の対比の研究は継続すべきである。

朝鮮半島の木製当て具については、林堂洞遺跡（慶尚北道慶山市）と火旺山城（慶尚南道昌寧郡）の２点で、いずれも芯持材が消耗して同心円文が生じたものである。後述するように、朝鮮半島、特に新羅・加耶では平行文や格子文といった同心円文以外の当て具痕跡が多種多様あり、木目の圧痕が観察されるものも少なからずあることから、未発見の木製当て具が多数あることは間違いないであろう。

土製当て具は亀田修一（2020）、望月精司（2013）を参照しながら、日本列島では 37 遺跡 60 点を集成した。注目すべきは、８世紀頃の有文の土製当て具について、同心円文、渦巻文が刻まれていて、平行文や格子文はないという点である。これらの土製有文当て具については、日本列島の同心円文志向をよく示していると考える。

朝鮮半島については、原三国時代以降土製当て具が出土しているものの、あまりにも事例が多いため、集成はできていない。確認できた範囲ではほぼすべてが無文であるが、６～８世紀の生産遺跡である花谷里生産遺跡（慶尚北道慶州市）の１例のみが当たり面に平行文が刻まれている。後述するように、朝鮮半島の有文当て具痕跡には平行文や格子文が多く、日本列島のように同心円文が圧倒的多数を占めるわけではない。土製当て具に平行文が刻まれているという事例は、日本列島と朝鮮半島の当て具文様についての志向が異なることをよく表している。

（２）朝鮮半島の当て具痕跡（報告書第３章）

本章では当て具の使用が確認できる楽浪･原三国時代から統一新羅の土器までを扱った。まず、朝鮮半島で当て具が明らかに使われる初めての例は楽浪土器である。楽浪土器では、当たり面に刻みを施さない木製当て具が使われていて、それは木目が転写されていることから確認できる。また、木目には同心円文（年輪）だけでなく、同心弧文・平行文もあり、芯持材以外も使われていたことがわかる。このような刻みを施さない木製当て具は京畿道・江原道一帯に見られる楽浪系土器を経由して百済土器の製作技法に受け継がれる。漢城百済の長胴甕などの軟質土器の内面にはしばしば、同心円文・同心弧文・平行文といった文様が見られるが、いずれも木目の圧痕であり、当たり面を刻んだ様子は窺えない。なお、この技法は百済では継承されないようで、熊津・泗沘期の百済ではほとんど見られないとともに、全羅南道の栄山江流域に勢力をもった馬韓の領域でもほとんど見られない。

一方、加耶・新羅が展開する慶尚道では、三国時代初頭（４世紀代）までは陶質土器短頸壺などに無文当て具痕跡があることから、土製無文当て具が用いられていたと思われる。ただ、４世紀末～５世紀前葉に該当する陶質土器壺の内面で凹凸の弱い同心円文当て具痕跡を確認した。これは芯持材の木製当て具を使った際の年輪の圧痕であり、少なくともこの時期以降は木製当て具が使われていたことがわかる。５世紀後半以降の加耶・新羅では有文当て具が多用され、同心円文･平行文･格子文、複合重線文など、さまざまな文様の有文当て具痕跡が確認されている。

まず、加耶（洛東江西側とする）では平行文当て具痕跡が比較的多くある。平行文当て具については、平行文の圧痕のみの場合が多く、木目（柾目）の圧痕の可能性が高い。また、擬格子文となっているものも少数あり、木目に直交もしくは斜交して平行文を刻んだ当て具が存在したこともわかる。新羅については、加耶土器と同様に同心円文・平行文・格子文・複合重線文など、さまざまな文様の有文当て具痕跡が確認されているものの、比較的多いのが同心円文である。ただし、他の当て具痕跡と大差があるわけではない。

なお、有文当て具痕跡が三国時代加耶・新羅の属性であるということを知らしめるのが、領土拡張とともに、有文当て具痕跡を残す土器もその地に登場するという点である。加耶は５世紀後半～６世紀前半頃に大加耶勢力が全羅南・北道の東部まで拡がり、そこで加耶では通有の平行文当て具痕跡を残す軟質長胴甕などの土器が多数見つかっている。新羅については、６世紀後半以降に洛東江西側の加耶領や、忠清北道や京畿道といった漢江流域の百済領を手中に収める。後者の百済は有文当て具をほとんど用いないが、新羅が進出して以降の漢江流域では有文当て具痕跡を残す土器が現れるのは、明らかに有文当て具が新羅と相関していることを示す。

三国時代が終わり、統一新羅の時代になると、発掘調査で確認できる京畿道・江原道以南の地域については、全域で有文当て具痕跡の土器が見られるようになる。これは新羅の土器製作技法が全域に広まったことを示している。有文当て具痕跡の種類は、基本的に三国時代加耶・新羅と変わりないが､放射状文･扇状文が各地で目につくようになる｡統計的な検討はできていないが、三国時代よりも種類が増えているように窺える。また、新羅の王都である慶州を中心に、鉢や把手付壺に高い割合で粗い格子文・斜格子文当て具痕跡が残るという点は、器種によって使われる当て具が異なる可能性がある。これについては朝鮮半島全体でいえるのか、もしくは慶州の地域性なのかは把握できていないが、両方の可能性を念頭に置く必要がある。

（3）須恵器の当て具痕跡から見える地域性と地域間交流（6～7世紀）（報告書第4章）

本章では、日本列島内の 6～7世紀の異形有文当て具痕跡の須恵器を集成し、検討を加えた。北部九州については、以前に筆者が指摘していた内容と変わりはない（寺井 2008 など）。内面に平行文当て具痕跡、わずかではあるが格子文当て具痕跡を残す須恵器が多く見つかっていて、平行文当て具痕跡については、胴部下半に残り、上半は同心円文当て具痕跡であることが多いことから、使い分けをされていたことがわかる。生産地については三郎丸堂の上C遺跡（宗像市）、苅又窯跡群（小郡市）などであり、元岡・桑原遺跡群（福岡市西区）では窯跡は見つかっていないものの、木製の平行文当て具が出土している。

今回の課題研究での進展は、島根県米子市の石州府古墳群で出土した複数の須恵器甕で平行文当て具痕跡があることを確認した点である。北部九州と同じく胴部下半で平行文当て具が使われているという点は、製作技法も共通することを示すが、口縁部形態が明らかに異なることから、北部九州からの搬入品の可能性は低く、在地生産の可能性がある。なお、石州府古墳群からやや離れるが、旧淀江町には石人・石馬が出たことで有名な石馬谷古墳がある。伝統的に北部九州との繋がりがあり、その中で平行文当て具が須恵器生産に使われるようになったのではなかろうか。この立証のためには課題は多く残るが、地域間関係を探るのに平行文当て具痕跡は有効な素材と考える。

（4）北部九州における軟質系土器と「似非土師須恵器」（報告書第5章）

本章は寺井（2018・2019）で得た、6世紀後葉のタタキメを残す酸化焔焼成の土器についての課題を継承したもので、本来であれば重点的に検討したかった課題であるものの、新型コロナ感染拡大で資料調査が十分にできなかった。そのため、比較的まとまって調査ができた大野城市域の事例に絞って検討したものである。

タタキメを残す酸化焔焼成の土器について、学史的には「似非土師須恵器」（橋口達也 1989）などと呼ばれ、須恵器の製作技法と関連するものとされてきた。ただし、当て具痕跡については、同心円文当て具痕跡だけでなく、平行文当て具痕跡もあり、須恵器の系譜と位置付けられるのか否か、という点が課題の出発点であった。

そこで平行文・同心円文を残す酸化焔焼成の甕、須恵器の同じような形態の甕（壺）、土師器甕、さらには平行文当て具を多用する三国時代加耶の甕についての製作工程の比較検討を行った。その結果、平行文・同心円文を残す酸化焔焼成の甕については、前者が肩部に異なる方向にタタキを施しており、後者については須恵器の製作工程と共通することを確認した。また、肩部に異なる方向でタタキを施すのは加耶の軟質土器でもあり、須恵器よりも軟質土器との関連の深さを指摘し、「軟質系土器」と呼ぶべきであると考える。ただし、タタキメについては北部九州では平行文に木目が直交する擬格子文であるものの、加耶の軟質土器では擬格子文が顕著ではない。木目の方向がタタキの方向を示すことから、軟質系土器と加耶土器ではタタキを施す方向が異なる可能性もある。この点については加耶土器の調査が不十分であるため、今後の課題として残したい。

なお、大野城市域では御笠川を挟んで東側に乙金地区遺跡群があり、西側には牛頸窯跡群がある。軟質系土器が数多く確認できるのは乙金地区遺跡群であり、牛頸窯跡群では軟質系土器は2例しか確認できていない。加えて、前者の遺跡群では長胴甕は軟質系土器と土師器があるものの、後者の地域、さらにその北側の春日市域では土師器に限られる。

さらに、北部九州では軟質系土器は乙金地区遺跡群だけでなく、糸島半島東部の元岡・桑原遺跡群や徳永遺跡群（福岡市西区）、鹿部田渕遺跡といった古賀市の花鶴川西岸の遺跡群でなどで数多く出土しているとともに、宗像から糸島にかけての玄界灘沿岸の遺跡で見られる（寺井 2018・2019）。軟質系土器がほとんどないという点では牛頸窯跡群やその周辺地域が特異なのであり、畿内的な影響の強いこの地域だけが、異なる繋がりを持っていたことを示している。

（5）摂津・河内に搬入された加耶系軟質土器（報告書第6章）

本章では、平行文当て具痕跡などを基に、これまで漠然と「韓式系土器」と呼ばれていた酸化焔焼成の土器について、加耶系であることを示した。当て具痕跡や器形の特徴を基にして近畿地方で調査を進めたところ、30 点ほどあることが明らかになり、その多くが上町台地北端や河内湖沿岸であった。また、河内湖を離れた大和や和泉、摂津西部（兵庫県域）では平行文当て具痕跡の酸化焔焼成の土器は確認できなかった。

なお、この種の土器には長胴甕や平底深鉢、短頸壺などがある。いずれも平行文当て具痕跡という、近畿地方では皆無に等しい特徴であるとともに、器形も在地のものとは異なる。技法・器形が在地とかけ離れたものであるとともに、北部九州の軟質系土器のように数多く出ているわけではないため、搬入土器の可能性が高いと考えた。

（6）8～9世紀の当て具痕跡から見える地域性と地域間交流（報告書第7章）

本章では、奈良時代から平安時代初頭、すなわち8～9世紀の異形有文当て具痕跡の須恵器について、当て具痕跡のバリエーションや地域的特徴を検討した。本課題に取り組むきっかけは、奈良時代の近畿地方に異形有文当て具の須恵器（もしくは陶質土器）があり（寺井 2020）、その系譜をつかもうと日本全国の当て具痕跡の地域性を把握しようとしたことにある。研究を進めるにしたがって、地域的な特徴の把握だけではなく、系譜の展望を持つに至った。

まず、近畿地方以外については九州島の西部地域、本州の日本海側で同心円文以外の有文当て具痕跡が数多くあることがわかった。時期については岡山県備前市の佐山新池１号窯の８世紀後葉の事例（平行文・扇状文・放射状文当て具痕跡など）が最も古いようであるが、研究対象が甕壺の類であるため、厳密な時期比較は困難なのが実情である。多くは９世紀代であるものの、８世紀代に上るものは他にもあると思われる。九州島の西側の地域の須恵器は、上半に同心円文もしくは放射状文、下半に縦方向の平行文を使うものが多く、これは熊本県北部の荒尾窯を起点に広がったものと考えられる。また、山陰地方については放射状文が、北陸地方でも石川・富山では平行文が比較的多い。さらに新潟県域では格子文当て具痕跡が比較的多くみられた。限られた実物調査ではあるものの、地域的な違いが窺えた。

一方、近畿地方では難波や平城京で、平行文・格子文・扇状文・放射状文などの当て具痕跡の土器が出土しているが、生産地では確認されていない。この中には須恵器と比べて硬質の焼成のものがあり、統一新羅からの搬入品の可能性が考えられるものもある。また、いずれも８世紀代であり、生産地で確認されている時期より若干古い点が課題として残る。

なお、８～９世紀の異形有文当て具が採用される背景の一つとして、新羅（統一新羅）との接触が考えられる。鄭淳一（2015）などで指摘されているように、日本海側に新羅人の流来が増加し、宝亀 11 年（780）に２度の縁海警固の命令（勅）が出されるように、国境警備が強化される時期でもある。この時期の当て具痕跡に新羅と共通するものが多いのは、こうした新羅からの移住者が窯業生産にかかわった可能性を示唆する。ただし、この点は今後の課題でもあり、当て具痕跡だけではなく、製作技法の比較検討も進める必要がある。

（７）まとめ

以上のように６つのテーマに分け、当て具・当て具痕跡についての研究をまとめた。当初は異形有文当て具を基に地方の対外交渉の主体性を解明できると期待し、申請課題名を「有文当て具痕跡から窺える律令国家成立前後の地方の主体性と対朝鮮半島交流の研究」とした。ただし、研究を進めると、主体性だけではなく、東アジア情勢の変化という外的要因があることも見えてきた。いざ始めて思い知らされた感がある。タイトルには「主体性」という表現を残しているが、問題があるのは認識している。また、当て具及び当て具痕跡の研究で明らかにできるのは、本書で取り組んだ課題以外にもある。以下では、研究を通じて見えてきた課題を簡潔に記したい。

まず、研究を通じて見えてきた日本列島における当て具の特質について記す。須恵器出現以降、内面には同心円文当て具痕跡が主としてみられる。この同心円文については刻みを施さず、年輪の凹凸が露出したものがある一方で、同心円文を刻んだものもある。いずれにせよ、当たり面にあるのは同心円文なのである。ただ、６世紀後葉～７世紀の北部九州や山陰地方、８～９世紀の九州島西部や山陰・岡山・北陸地方では、平行文や放射状文、格子文などの異形有文当て具痕跡を残す須恵器が現れる。これらはいずれも朝鮮半島と関連するものであるが、前者は北部九州勢力の主体的な交流の結果、後者については東アジア情勢の変動によって、朝鮮半島からの流来民による可能性が考えられる。一方、朝鮮半島では加耶・新羅で有文当て具痕跡があり、日本とは異なり、同心円文・平行文・格子文・放射状文など多様な文様がある。同じようなタタキ技法でありながら、日本列島の同心円文への固執が改めて確認できる。今後はこの要因について追及する必要がある。

また、異形有文当て具痕跡は地域的特徴を示しているものでもあるので、地域間交流の手がかりともなる。特に、一貫して同心円文が維持される近畿地方では、搬入土器を見出すのに有効である。時には日本列島内ではなく、朝鮮半島の可能性も念頭に置くべきである。

参考文献

亀田修一 2020「無文当て具に関する覚書」『福岡大学考古学論集 3　－武末純一先生退職記念－』

鄭淳一 2015『九世紀の来航新羅人と日本列島』　勉誠出版

寺井誠 2008「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」『九州考古学』第 83 号　九州考古学会

寺井誠 2018「６～７世紀の北部九州の土器に見られる新羅・加耶的要素」『第 13 回九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学大会　海峡を通じた文化交流』

寺井誠 2019『渡来文化の故地についての基礎的研究－新羅・加耶的要素を中心として－』平成 28～30 年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書

寺井誠 2020「難波など畿内に搬入された他地域産須恵器－有文当て具痕跡を基にして－」『共同研究成果報告書』14 大阪歴史博物館

寺井誠 2023『有文当て具痕跡から窺える律令国家成立前後の地方の主体性と対朝鮮半島交流の研究』令和元～４年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書

橋口達也 1989「似非土師須恵器」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ　生産と流通の考古学』　横山浩一先生退官記念事業会

望月精司 2013「須恵器甕の成形叩きに伴う当て具文様の意味－車輪文当て具と陶製当て具の検討から－」『白門考古論集Ⅲ　中央大学考古学研究会創設 45 周年記念論文集』

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 寺井誠	４．巻 202
２．論文標題 馬韓からこんにちは～船出遺跡で出土した栄山江流域の陶質土器～	５．発行年 2021年
３．雑誌名 葦火	６．最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寺井 誠	４．巻 20
２．論文標題 当て具痕跡を基にした統一新羅からの搬入土器認定のための試論	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大阪歴史博物館研究紀要	６．最初と最後の頁 1‐20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34570/omhbull.20.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 寺井誠	４．巻 49
２．論文標題 第24回研究集会参加記	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中四研だより	６．最初と最後の頁 18‐19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寺井誠	４．巻 -
２．論文標題 上町台地北端及びその周辺の加耶系軟質土器－タタキメ及び当て具痕跡の観察を基に－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 難波宮と古代都城	６．最初と最後の頁 174-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺井誠	4．巻 19
2．論文標題 日本列島と朝鮮半島の木製有文当て具についての基礎的研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 大阪歴史博物館研究紀要	6．最初と最後の頁 17‐36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34570/omhbull.19.0_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 寺井誠	4．巻 （II）
2．論文標題 朝鮮半島の角杯と角杯台	5．発行年 2019年
3．雑誌名 辻尾榮一氏古稀記念　歴史・民族・考古学論攷	6．最初と最後の頁 178-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺井誠	4．巻 14
2．論文標題 難波など畿内に搬入された他地域産須恵器－有文当て具痕跡を基にして－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 共同研究成果報告書	6．最初と最後の頁 50-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 寺井誠	4．巻 -
2．論文標題 朝鮮半島の角杯と角杯台	5．発行年 2019年
3．雑誌名 辻尾榮一氏古稀記念　歴史・民族・考古学論攷（II）	6．最初と最後の頁 178-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 寺井誠
2．発表標題 有文当て具痕跡を基にした畿内への搬入須恵器の基礎的研究
3．学会等名 一般社団法人日本考古学協会第86回総会研究発表
4．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 寺井誠	4．発行年 2023年
2．出版社 大阪歴史博物館（科学研究費成果報告書）	5．総ページ数 114
3．書名 有文当て具痕跡から窺える律令国家成立前後の地方の主体性と対朝鮮半島交流の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関